

「横浜での 3 週間」

匿名希望 会社員

担当:野球・ソフトボール/審判へのサービス (横浜スタジアム)

1. 立志

2015 年の春、私はメキシコシティのとある日本語学校で授業をしていた。

新学期、初対面の学生たちに日本語を始めた動機を尋ねると、一人の学生が「5 年後の東京オリンピックに行きたいからです」と答えた。すると、他の学生も「私も東京に行きたいです」と言い出し、とうとうクラスの全員が「5 年後に東京に行こう！」と声を揃えていた。こんな遠い国から、日本に来たいと言ってくれる人たちがこんなにもいるとは。私も「ぜひ来て！5 年後に東京で会いましょう！」と応えた。

そのときは、学生たちが日本に来てくれたら、時間を合わせて日本をちょっと案内しよう、と考えた程度だった。当時は次の開催地が”TOKYO”に決まったと報じられたばかりだった。私は東京には住んでいないし、自分がボランティアになるとは思ってもいなかった。しかし、たくさんのメキシコ人が日本に来たいと思ってくれていたことを知って胸が熱くなった。

翌年、リオデジャネイロオリンピックが開かれた。閉会式でマリオに扮した安倍元首相を見たとき、他人事に思っていた東京オリンピックが、急に現実味を帯びて迫ってきたように感じた。

日本国内でもオリンピックの準備に関するニュースをよく目にするようになった。そんなときにふと見つけたのが、新条正恵氏のブログだった。彼女は、リオデジャネイロオリンピックに語学ボランティアとして参加されていた。ブログを読んでいると、南米ブラジルに今まさに居るような臨場感が味わえた。そして、全く未知の世界だったオリンピックのボランティアという仕事についても、知ることができた。

私は、彼女のようにマルチリンガルではないけれども、日本語教師として、何かできるはず。メキシコシティの我が教え子だけではなく、たくさんの方が日本に来てくれるこの機会に、日本の良さを伝えたい、と思った。そうして、TOKYO2020 のボランティアに応募することに決めた。

2. 採用決定と開催延期

2018 年 9 月、TOKYO2020 のボランティアに志願した。ボランティア志願者のオリエンテーションは 2019 年 7 月。九州でも開催されることを知り、嬉しかった。私は福岡市のオリエンテーションに参加したが、数回に分かれて 1000 人近くの方が参加されていたようだ。広島や沖縄から来られた方もいた。更に遠く、アメリカ在住の方も！もちろん外国の方もおられ、日本での開催といっても世界的な大イベントなのだと実感した。また、ボランティアに申込み人たちは、はつらつとした方が多かった。内気な私も声を張り上げて自己紹介し、頑張ってグループワークに参加した。始まる前からワクワクさせてくれるイベントだと感じた。

それから そわそわしながら日々を過ごし、2019年9月にボランティアの研修案内が来た。ボランティアとして採用されたようで、ほっとした。当時は、各メディアがボランティアへの待遇について酷評していたため、あまり周りには言えなかった。オリンピックを歓迎してくれる雰囲気になったら言おう、と決めた。

それなのに、世界はまさかと言えない事態に陥った。新型コロナウイルスの感染拡大はオリンピックを延期させるどころか、人々の生活を大きく狂わせた。入国制限が敷かれたことで留学生が日本に入ってくられなくなり、日本語学校も大打撃を受けた。希望が潰え、私の生活もオリンピックどころではなくなってしまった。それでもオリンピックを心待ちにしてくれていた学生たちのことを思い出し、私にできることはしようと、ボランティアとしての参加を決めた。

3. いざ、横浜へ

2021年。ボランティアに応募してから早3年が経とうとしていた。日本国内でも、世界的にも、オリンピック開催に反対の空気が高まっていた中、ボランティア運営事務局は、準備を続けてくださっていた。開催するのかもしれないのか、観客を入れるのか入れないのか、ギリギリまで決まらない中準備するのは大変だったと思う。様々な変更点があっても最後まで準備を続けてくださった運営事務局の方々には本当に感謝している。

2020年3月に決まっていた活動の役割は、横浜スタジアムでのソフトボール・野球の競技担当だった。横浜での活動を志願したのは、中学時代のソフトボールの経験からだった。私は長崎県大村市の大村中学校でソフトボール部に所属していた。福岡出身の上野由岐子さんのファンだった。そして、藤田倭選手の出身崎辺中学校には昔コールドで負けた記憶がある。当時の出場選手は名前も知らないままだったが、1歳違いの藤田選手はもしかするとあの試合に居たのかもしれないと思った。ずっと好きだった競技の会場でボランティアをさせてもらえることが嬉しかった。

出願当初は会場の案内ボランティアになれたら嬉しいと思っていた。会場の外で外国の方に「トイレはどこですか？」と聞かれて答えられるように、簡単な文を数か国語分覚えるつもりだった。2019年のお正月は韓国釜山で過ごし、学校に通って少しでも韓国語を覚えたりもしていた。しかし、案内ではなく競技担当に決まったため、違う準備が必要になった。

私の担当は、国際競技連盟(WBSC)の方へのサービスだった。この活動にはきっと語学力が必要だと感じたため、私はスペイン語の勉強を再開した。

7月15日、ソフトボール・野球競技の活動初日。開始1時間前に横浜スタジアム内に入ったものの、周りに同じようなボランティアが全くおらず、いきなり迷ってしまった。3人の方に道を教えていただき、なんとか集合場所の「室内練習場」に着いた。もう一人早く来ておられた滋賀県のボランティアさんと仲良くなることができた。

その日はスタジアム内の各部屋を案内してもらい、作業手順を確認した。WBSCや審判さんからの要望は、チームリーダーを通して伝えられるとのことで、語学の心配は要らなさそうだった。チームメンバーとも打ち解け、さあ翌日からの活動を頑張ろうと、リーダーに集合場所を尋ねると、「実はまだ決まっていません」とのこと…。ボランティアの細かいところがまだ決定していないのが、今大会の脆弱性かと思った。チームメンバーのやる気が私の心の支えとなった。

4. 夢と現実

初日の不安は現実となった。ホテルに泊まり、寝る準備をしていると、「明日のチームの活動はありません」とのメールが届いた。実際には、私たちのチームだけではなく他のいくつかのチームが「活動なし」だった。これは、翌日の予定が試合ではなく公式練習だったため、試合が無いときは出番が無いチームは「活動なし」ということだ。

そして活動予定3日目も「活動なし」との連絡が来た。さすがに困った。こちらは遠方から来ているのだから、活動が無いと初めからわかっていたのなら、シフトを決めた4月の時点で言うてほしかった。せっかく来たのに怒るだけではどうしようもないので、ボランティアリーダーの方をお願いをして参加させてもらった。この日は、審判さんへのサービスチームの皆さんと一緒に活動させていただいた。こちらは、朝のシフトに7名参加予定が2名しか参加しなかったとのことで、私に加わる余地があって助かった。しかし、活動に来なかった5人の方はどうしたのだろう…これが、無償のボランティアの実態かと思った。シフトを決めても来なかったり、そもそも活動が無かったりするのには、真面目にボランティアに参加しようとする者の気力を削いでしまう。

その後も私はこちらのチームメンバーとして活動させてもらうことになった。当初の予定のチームは、だいが活動を縮小したらしく、メンバーも他のチームに行ったりしていた。後日知った話だが、このチームの仕事自体はたくさんあったものの、ボランティアに任せられる活動内容ではなかったらしい。機密情報などもあったのだろうと推測する。研修で説明された活動例としては、①WBSC 役員が水が欲しいと言う、②要望をリーダーまたは通訳が聞く、③ボランティアが水を取りに行きリーダーに渡す、というものだったが、水1本をもらうために役員がこんなお願いをしなくても、目の前にある冷蔵庫を自分で開ければ水は入っているのである（もちろん、庫内の飲み物の備蓄をするのはボランティアの仕事ではあった）。実際に頼まれる内容は水などという簡単なものではない。ボランティアの活動内容の限界を痛感した。

私たちのチーム以外にも、「ボランティアが余る」実態は散見された。もし有観客であったとしても、これは変わらなかつたであろう。他のメンバーは、「日本人は集合時間をきっちり守り、業務を遂行するから、リオデジャネイロオリンピックのときよりもボランティアが余ることになったのだろう」と言っていた。ボランティアとは、キャンセルを見越したオーバーブッキングなのだろうか。

5. ボランティアの醍醐味

悪いことばかり書いているようだが、その後の活動は本当に楽しいものだった。私たちの作業は、主に①審判室内の消毒・清掃、②審判に渡す飲み物・タオル・氷の準備、③審判に②を持っていく、④試合後の審判更衣室の消毒・清掃という流れだった。これを1日1~3試合繰り返す。朝、昼、夜でシフトが分かれており、それぞれのシフトに入らせてもらったが、様々な経歴を持つメンバーさんと仲良くなれ、たくさん話せた。作業では、3塁側ベンチの裏手に陣取り、試合のモニターを見ながら1アウトで水と氷をクーラーボックスから出し、2アウトになったら球場に持っていった。グッツーになったときは慌てて出ていったのも楽しかった。コロナ対策のため、毎回の机や椅子の消毒も抜かりなく行った。チームで一斉に行うので、素早く終わらせることができた。

チームメンバーは、野球やソフトボールの経験がある方が多く、現役のソフトボールコーチや球場アナウンスの方もおられた。そしてこの活動場所の土地柄、横浜ベイスターズファンの方が多かった。ソフトバンクファンは私だけで肩身が狭かったが、横浜スタジアムの裏話やベイスターズの選手について色々教えてもらえたので勉強になった。

そして、選手とすれ違う回数も多かったため、各国の選手や監督に挨拶することができた。挨拶以外は禁止だったため、全力で挨拶することにした。メキシコやドミニカのチームにはスペイン語で応援ができたので、喜んでもらえたりもした。韓国の選手には韓国語で挨拶をし、すると選手もお辞儀や挨拶で返してくれて、嬉しかった。昨今の日韓不仲の報道も真実ではないと実感した。日本語で「こんにちは」「ありがとう」とも何回も言った。

私は、ボランティアの醍醐味は「チームメンバーとの絆が深まる」ことだと言いたい。同じ時に同じ場所で同じ経験ができる相手を大切にしたいと思った。チームメンバーの皆とは、コロナ禍のために誰とも食事に行ったりできなかったが、いつかコロナが収束したらまた会おうという約束をしている。

選手をサポートする活動なら選手との、観客をサポートする活動なら観客との、ボランティアをサポートする活動なら他のボランティアとの絆も生まれているだろう。しかし、チームメンバーと共に頑張り、共に悩み、共に応援した経験は、かけがえのないものとなった。

6. 最後に

メキシコから観戦しに来たいと言ってくれた学生たちは、来日が叶わなかった。日本行きの切符を買っていた友人も、飛行機が欠航になった。ボランティアに応募していた私の教え子はコロナで入国できなかった。無観客でオリンピックを開催しても、世界中の人を幸せにすることはできなかった。私も志した当初の夢が叶わず悔しかった。

しかし、世界が不安に満ちているこのときこそ、人と人とのつながりが大切だと実感した。これで終わりではない。まだまだ未来はあるのだ。世界はコロナウイルスという未知の恐怖に立ち向かい、今は闘い方を学んでいるところだ。しっかり闘えるようになったら、世界中からのお客様に日本に来てもらいたい。そして、本当のおもてなしをしたい。